



利根山光人

記念美術館通信

Memorial Art Museum News Letter

Toneyama Kojin

〒024-0043 岩手県北上市立花15-153-2

TEL/FAX 0197-65-1808

令和6年度前期企画展

好評開催中 6月2日(日)まで

利根山光人 魅惑のインド女神たち

晩年の利根山を虜にした古代インドの石彫群

今春で没後30年となる利根山光人。彼はプリミティブ(原始的)なものに強い興味関心を示していたようで、とりわけメキシコの民族や古代文明に惹かれたことは周知のとおりです。

度重なるメキシコ訪問の帰途、利根山の心を奪ったのは古代インドの彫像群でした。彼は晩年の1980年代後半から頻りにインドを訪問し、エッセイも残しています。石彫の女神たちはあからさまとも言える性的魅力を発散しており、これこそが人間本来のおおらかさと豊穡をもたらす地母神の姿だと利根山は捉えました。さらに、日本で見る神仏とはあまりにもかけ離れた様相とその背景を考察し、生命力が失われた現代文明へ警鐘を鳴らしています。



河神ガンガー(スケッチ)



神々の都(コナラック幻想)(リトグラフに手彩)

今回の企画展に合わせ、東京の一般社団法人アルテトネヤマよりインド関連作品(2点)を借用し、市所蔵作品と合わせて計27点で本企画展を構成しました。対象を素早く的確に捉えた線のストロークは説得力を持って迫り、彫像の妖しげでユーモラスな雰囲気をも的確に表現しています。メキシコ文化とはまた一味違うインドの女神たちの魅力を感じ取っていただければ幸いです。

関連展示:「利根山光人インドの旅」写真展
北上駅前おでんせプラザぐろーぶ3Fにて展示中



—今年度の企画展情報—

◆中期企画展(6月8日~8月25日)

ゆうづうむげ
融通無碍 カミムラコーイチ展

墨や線香、ペン、クレヨンなど、多彩な材料で味わい深い構成的な抽象作品をコンスタントに発表しつづけるアーティストの画業を紹介します。

2006年度利根山光人記念大賞展部門賞受賞。

2017年岩手県美術選奨受賞。

◆後期企画展(8月31日~11月24日)

生きものたち 宮嶋結香展

様々な動物をユーモラスに、そしてどこか物憂げな表情で描き出す人気作家の展示です。絵画、版画の独自の表現技法にも注目。2018年度利根山光人記念大賞展準大賞。

絵画修復見学会のお知らせ



これまでにも当館利根山作品の修復を手掛けてくださっている絵画修復士の土師広さんをお迎えし、修復見学会を行います。

興味のある方はぜひお越しください。

- とき 5月25日(土)午後1時30分~
 - ところ 利根山光人記念美術館
- 事前申し込み不要 参加料無料

鬼のモニュメント リニューアルプロジェクト

6月1日にお披露目!



鬼の館でのワークショップの様子

鬼の館と利根山光人記念美術館のコラボ事業として、今年開館30周年を迎える鬼の館のエントランスホールにある巨大なモニュメントのリニューアルを実施中です。故・岩間正男の鑄造作品「鬼面」(右写真参照)をオマージュした装飾お面に、公開ワークショップや学校などで多くの方々の協力のもと着彩を行いました。

4月20日(土)には飾り付け作業をワークショップ形式で行い、6月1日の開館記念式典でのお披露目に備えます。

こうした手作りのアート作品が新しい鬼の館の「顔」となります。ぜひ鬼の館にお出かけください。



~@TONE美~

ARTのある「まちづくり」へ
— 2021年 記念事業を振り返る — ⑧

この記念事業を迎えた時点で館の企画展は通算50回を迎えた。発行を続けてきた美術館通信は112号を数えた。そして全国公募展「利根山光人記念大賞展」の開催は6回で一旦その役割を終えている。振り返れば美術館の関連事業の歴史は他へ誇れる輝かしいものである。その歴史を振り返る後期企画展「利根山光人記念美術館のあゆみ展」がおでんセプラザぐろーぶ1階で開催された。さらには北上駅舎には駅員さんのご厚意により利根山コーナーを設置していただいた。駅舎の大陶壁画や事業の紹介パネルが理想的な場所に設置されたわけである。また、市立中央図書館にも「利根山光人特別展」のスペースが設けられるなど、北上市内を同時多発的に利根山作品や美術館の紹介が行われ、北上の市街地の持つ美術環境のポテンシャルの高さに改めて気づくことができた。

こうした外へと展開する記念事業の集大成がこの連載冒頭の「つながる太陽プロジェクト」と言える。新設された北上市保健・子育て支援複合施設ほKko(ほっこ)での公開で、子育てのための施設という点から言っても、広さのある優しい木造の空間はARTに調和した理想的環境であった。

奇しくも前年の11月、日本経済新聞に「メキシコの衝撃」という連載記事が4回にわたって掲載された。メキシコ美術と日本の芸術家とのかかわりが言及され、その最終回に利根山光人が岡本太郎と共に取り上げられた。近年、こうした評論で利根山にスポットライトが当たることは稀なので、記念事業を前にして大変喜ばしいことであった。2021年はメキシコ独立200年ということも考えると記事掲載のタイミングといい、不思議な巡りあわせを感じる。

9月に予定されていた記念式典はコロナのため11月に延期された。この記事を書いた日本経済新聞社の窪田直子氏が式典にて「メヒコ・マヒコー日本人画家を魅了したメキシコの魔術的世界とは—」という演題で記念講演会を行った。講演を聞いて改めてメキシコが日本の画家たちに与えた影響の大きさを感じ、「メヒコ・マヒコ」の持つ意味をかみしめることができた。

話はこの連載の冒頭、「太陽プロジェクト」完成披露作品展「わたしの太陽2021」に戻る。幅広く展開してきた記念事業はこの企画を持って終了する。多くの市民が描いた「太陽の絵」を見て改めて利根山を象徴するこの題材の面白さ、奥深さに気づく。「なぜ、人は太陽に顔を描きたがるのか。」という問いの答えは美術館で思い思いの太陽を描く市民の表情を見てもわかる気がした。子供たちは全身運動で絵の具を布に走らせる。やがて大人もつられて絵筆の動きはよくなるのだが、自由な発想の子供たちの姿に目を丸くして驚く姿は印象的であった。太陽という誰でも知っているテーマへの安心、よし悪しという評価が無意味とも言える自由さ…太陽は心の開放と自由の象徴でもあった。



鑑賞するだけがARTではない。参加し、気づき、つながり…こういった体験こそ美術館が担う社会的役割ではないか。

これらの事業を通して25年間の歴史を持つ丘の上の小さな美術館の発する芸術文化のエネルギーは感じ取っていただけたのではないかと思う。ひいてはこのエネルギーが北上の「まちづくり」につながるものと信じる。事業を終えた今、新たなスタートに立ち、新しい事業の構想に向かい、胸を高鳴らせている。

—了—
(専任研究員)